

12. 同上、三三三頁。
13. 同上、三三五頁。
14. 同上、三三五頁。
15. 岸本謙一『人間回復の道―仏教と精神医学―』（弥生書房、一九八四年。）
- 四種類（次元）説はこの他にも見える。中村 元氏（次項にて永井氏援用）。竹中正夫氏は①自然的生（ビオス）、②生魂（プシケ、精神）、③根源的生命（ゾーエ、宗教的生命）、④靈的生命（フネウマ、靈性）をあげる。（安平公夫監修『生命の意味』I―思文閣出版、一九九二年、二二頁。）西田幾太郎氏の生命観には①生物的生命②歴史的生命、③人間の生命、④永遠の生命があげられる。（田路 慧『日本近代思想における生命観』『人間と生命』―星雲社、一九九三年、四六一―四五頁。）
16. 永井隆正「生命に対する畏敬―宗教的情操教育の一視点―」『浄土宗学研究』第十三号（知恩院浄土宗学研究所、一九八〇年。）二五八頁。
17. 同上、二五八頁。
18. 同上、二五八頁。
19. 中村 元『自己の探究』二〇八頁。
20. 同上、二一〇頁。
21. 玉城康四郎「生命観の転回」『生命科学と宗教I―生命とは何か』（佼正出版、昭和五十七年）
22. 同上、六五頁。
23. 同上、六六頁。
24. 同上、六六・八一―八二頁。
25. 渡辺 格「物質としての生命」『生命科学と宗教』I、一七・一八頁。
26. 中村 元、前掲書、一九九頁。

ある。それは分子生物学が生命を生物に限り、また生命現象を物理法則で働く一種の機械と見⁽²⁵⁾、その本体に物質的なDNAなるものを発見したのに対して、宗教は生物のみならず無生物を含む、より包括的な生命を、その根源的なものとみなしているのである。ここではさらに仏教的な観点から、根源的な生命について触れておこう。この文脈での根源的な生命には一応二種類が考えられる。一つは超越的、他は内在的である。

超越的生命とは現実の諸現象の生命の根底に、これらとは独立して存在し、諸存在に生命を与える大生命を指すものである。

これに対して内在的生命とは現実の諸現象の世界から離れて存在するものではなく、その世界内に存在して、諸現象の生命の根源としてある大生命である。

この超越—内在論について、中村元氏は興味ある発言をしておられる。中村氏は日本中古天台における「本覚法門」は、大陸におけるものとは異なるとし、とくに「本覚」ということについて次の如く示している。

「本覚」ということは、インドでつくられた『大乘起信論』（漢訳）のなかにあるが、それは現象界の諸相を超えたところに存する究極のさとの意味であったが、いまや日本ではそれが現象のうちに引きずり下ろされた⁽²⁶⁾。

即ち「本覚」は中国では、超越的存在であったのに対して、日本中古天台では、内在的存在となったというわけである。

同様のことは阿弥陀仏についてもいえる。天台の源信僧都は己心

の弥陀を主張するが、法然は心外の弥陀を主張するのである。前者は内在的で、後者は超越的である。

しかし、仏教においては、この問題は二諦説によって会通される。即ち、絶対的生命の超越性と内在性についての発言は、真諦門か俗諦門かによって異なると考えればよいのである。即ち、超越性は俗諦門に属するものであり、内在性は真諦門に属する発言と考えればよい。俗諦門では現象と本体は異なるものと説く。それはそのように説くことが真理真実の意味を明らかにすることができるからである。迷いの目では二者は別である。しかし、真諦門では現象と本体は同じである。生死即涅槃、現象的生命即大生命である。悟りの目からはこの様に見えるのである。

注

1. 水原舜爾『科学から仏教へ』（大東出版、一九八〇年）三二頁。
2. 同上、一三三頁。
3. 中埜 肇『哲学的人間学』（放送大学教育振興会、昭和六十三年）六三頁。
4. 同上、六三頁。
5. 同上、六五・六六頁。
6. 同上、六六・六七頁。
7. 同上、六七頁。
8. 棚瀬睦男『科学と宗教における生命観』『人間 1—生命とは』（岩波書店、一九八五年）三〇八頁。
9. 同上、三二七頁。
10. 同上、三〇九頁。
11. 同上、三一〇頁。

助け合いながら営んできたものが、今ここに結実して自己として現われているということになります。仏教の禪定、つまり全人格的思惟によつて自己の存在が凝縮されていく。その凝縮していくなかに自己意識とか、さまざまな精神作用とか、あるいは身体的なものとか、そういったものがすべて解消して、ひとつの中に凝縮する。」

ここにおいては、自己意識とか、精神とか、身体とか、というものの区別は解消された、自己存在そのものに凝縮されていく、そこに人格的身体が現れる。氏は言われる。「始まりのない無限の過去からの働き、営みの結果として、今私がここに現存している。その自己存在のエッセンス、ワンポイントに圧縮したそのエッセンスが、人格的身体あるいは業体というものであります。」⁽²³⁾

以上の三つの生命は主体的生命ではあるが、やはりこれは自己の中に閉じこめられた生命である。さらにこれを深めると、そこには第七の開放された生命が展開されてくる。

これは形なき生命、一切を超越した純粹な宇宙の生命、命の中の命、仏の命、神の命といわれるものである。これは第三の人格的身体の深層において自覚される生命である。これによつて自己は閉ざされた生命から開放された生命へと入つて行くのである。ここに救いも展開して来るのである。

(人格的身体を通して宇宙と生命と一体になることにより、顕れて来る生命である。)

「この開放的生命と申しますのは、全く形を離れた命の中の命、いわば仏の命、神の命であります。そしてそれは、仏教でいうとこ

ろの業異熟、つまり人格的身体にこそ、初めて『顕わになってくる』純粹なる生命であります。」⁽²⁴⁾

かくの如く、玉城氏は、客観的な生命から主体的な生命、そしてさらにその究極において把握される宇宙的生命をあげているのである。

ま と め

生命を語る場合、われわれはまず、生命現象という具体的な姿から始めなければならない。しかし、それは一つの側面からのみ捉えられるものではない。先に見て来た生命観の多様性はその観点の多様性に基づくことはいうまでもないが、これには、大別すると広義の生物学的レベルと宗教的レベルが想定される。そして、その他はその中間のレベルに属すると思われる。

一般に生命現象に関わる学問として、生物学をあげることができよう。これは生命現象の物質的な側面、あるいは自然科学的研究の対象となりうる側面を分析説明して行くものである。これに対して、生命現象への宗教的、哲学的アプローチは、広義の精神的(単に物質に対する精神ではない)側面乃至は精神的意味に関する側面に關わるものである。

生物学、とくに分子生物学は生命現象の奥にある物質的根源(要素)を求めて行った結果、DNAを発見したのであるが、これは宗教が生命の根源を求めるのに似ている。しかし両者の間にも相異が

第一は分子生物学という生命である。これはDNAを中心とした生命観で、今日の生物学の大きな成果の一つである。しかし、これは我々の現実の生命から遠い抽象的な生命である。

第二は大脳生理学の生命である。我々が「頭で考えたり、感じたり、あるいは行動・動作に命令を出したり」我々が見たり、聞いたり、話したりすることに見られるものである。これは全て頭の働きによるものであり、また我々が生命を感じるものである。これは第一の生命に比べて、より身近に感ずる生命である。しかし、これは頭から上のものであり、体全体からすれば部分的なものにすぎない。

第三は医学的生命である。これは人間の身体そのものにかかわる生命の領域である。大脳生理学に比べれば、この場合は身体全体についてのものである。しかしこの場合でも、生命とはどんなものにかついて考えてみると、心臓の鼓動とか、脳波とか、瞳孔などに表れている現象によって判断されるものである。生命があるとは以上の機能において見られる。これらがなくなつたとき、生命が終わつたというのである。

これらの三つの生命観はいずれも客観的なものとして処理されるものである。しかし、さらに自己の生命として見ることが生命を語る上で大切な意義をもつものである。

以下の三つ（第四から第六まで）は生命についての主体的考察にものとづくものである。

第四は自己意識の生命である。自己意識とは自分であるという意識である。我々は自分について意識しないこともあるが、必要に応

じてそれが意識にのぼって来る。そして自己を自己として意識する生命が自己意識の生命である。これは同時に自己を他人と区別するものでもある。

第五は無意識の生命である。主体的生命を立体的に掘り下げていくと意識のレベルから、さらに無意識のレベルの生命が想定される。フロイドの無意識説によれば、この無意識層には情動的な強い力が潜んでおり、それが個人の行動を左右すると言われている。仏教の唯識では、意識の奥にマナ識・アラヤ識などの層があることが指摘されている。

第六は人格的身体の生命である。人間は意識的存在であるだけでなく、身体的存在でもある。この両者は別個のものではなく「意識は身体に包まれており、さらに禅定を徹底していけば「意識は身体に吸収されていくもの」であり「そして逆に身体は意識に貫かれていくもの」である。これが人格的身体というものである。

これは仏教という業異熟の考えである。玉城氏は瞑想を実修することにより、この境地を体験され、次の如く語っておられる。「それは無限の過去から、あらゆるものと交わりあり、営みあいながら、その結果として今ここに実存しているところの『私』という自己存在の実体であります。」⁽²²⁾

ここにおいては、精神とか身体とかの区別は解消し、自己存在そのものの中に凝縮されていくのである。

この点について、氏は次の如くいわれる。「私という存在をたどっていくと、無限の過去からありとあらゆるものとの交わり、互いに

端的である。故に、人間の生命が最も大切なものであるとする立場である」と言われている。人間の生命は、われわれにとって、最も身近なものであり、しかも、それに「最も大切なものである」というのである。

しかし、生命現象は人間だけに限ったものではない、第二の動物にも、第三の植物にもみられるのである。しかも注意しなければならぬのは、この第三までの生命（人間・動物・植物の生命）が「自然科学のいう生命⁽¹⁶⁾」であるという点である。

今日の研究では「生物の形や性質が多種多様であつても、すべての生物に共通な面がみられる『生物化学的一様性』をもっているといわれ、しかも、地球上の生物は全部共通の祖先をもっているらしいといわれている⁽¹⁷⁾」のである。

第四の無生物の生命とは「具体的には、無機物、鉱物、例えば岩石や流れる水、空気、光線など」に想定される生命である。これは宗教・哲学・詩歌などでよく語られるものである。

第五の世界を包括する生命については次の如く示されている。「この立場からすれば世界の根底に『生命』があるととして、その『生命』に基づいて成立している個々の現象世界もまた『生命』であるといえる⁽¹⁸⁾」。

これは、世界に存在する個々のものの生命ではなく、これらを全て包括する生命を指しているようであるが、この内容についてはさらに吟味する必要がある。というのは、ここにいう「全てを包括する生命」とか「世界の根底にある生命」とは超越的生命か、内在的

生命か、いずれであろうか。

永井氏のこの五種類の生命観は中村氏の考えに基づくものであるが、中村氏は「全世界が生命⁽¹⁹⁾」であるという前提に立ち、「生命の発現の段階的差異を認める」ということから、四種類の生命をあげておられる。それが永井氏の示す第一から第四までの生命である。永井氏が第五にあげた生命はこの四種類の生命を包括した生命とされているように思える。中村氏ではこれが「全世界」を一つの生命と見るところに示されている。この場合中村氏の言われる「全世界が生命である」という考えは、生命の超越性をいうのではなく、内在性をいうのである。中村氏は次のようにいわれる。

絶対者を人間ないし生き物の「生きていること」の内に見出すことである。それを超えた超越的なものうちに求めてはならぬ。生命は絶対のものに相即している⁽²⁰⁾。

このことから推察すれば永井氏の第五の生命は超越的ではなく、内在的生命ということになる。

5. 七種類説

仏教思想家玉城康四郎氏は生命を七つの段階に分けて考えておられる⁽²¹⁾。これは大きく別けて三つの部分からなっている。第一の部分は客観的生命、第二は主体的生命、第三は開放された生命である。第一の客観的生命は、いわゆる客観的な現象としての生命についてのものである。これにはさらに三つの立場があげられる。

3. 四種類

精神医学者、岸本鎌一氏は生命を四種類（次元）に別けて考えられる。⁽¹⁵⁾

① 生物的生命

これは生物学などが対象として考える、一般的な生命である。細胞の生命、多細胞の生命、種の生命などである。

② 社会的生命

これは人間が作りあげた作品・業績など社会的な意義をもつたものを指す。これには個人的なものもあれば、集団（家族・民族・国家）的なものもある。例えば、ニュートンの「万有引力の法則」はニュートンの社会的生命である。社会的な事柄に「生命」をかけるとき、そこでの出来事には、その人の生命が別な形で表れている。

③ 心理的生命

これには意識的生命と無意識的生命が考えられる。意識的生命とは知情意の生命である。知の生命は情の生命より長く続くように思われているが、臨床的には情の生命も長いものであることが判る。仏教でいう「業」の思想はこれに似ているようである。

無意識の生命は、意識の生命に比べてさらに長い。フロイドは個

人的な無意識は個人の死と共に消滅するというが、ユングは普遍的無意識を主張し、その無意識は非常に長く続くという。神話、おとぎばなし、未開人の心理などは、ずっと長く続いている。それは現在では、夢、精神病者の妄想などの形で表れる。

④ 精神的生命

これは、意識が客観的なものであるのに対して、主体的なものである。これは宗教にいう永遠の生命である。生物的生命の死を超えて、なほ生きつづける生命である。信仰を通して獲得された生命である。曾我量深師のいわれる「信に死して願に生きよ」という言葉によく表れている。それは仏と共に生きる生命である。

4. 五種類説

浄土宗学研究所の永井隆正氏は中村元氏の考えを参考に五種類の生命観（生命の立場）をあげている。

① 人間の生命

② 動物の生命

③ 植物の生命

④ 無生物の生命

⑤ 世界を包括する生命

第一に人間の生命については、「われわれは、人間として生きているのであるから、人間の生命がわれわれに最も近く、最も直接的・

織化されている。それらに対して、もう一度その意味の相違の奥にある共通した基礎的な立場を明らかにする實在論である。これは哲学が自明性について証明を必要とするのに対して、むしろ「直観による真理の把握⁽¹¹⁾」を特色とする立場である。これが宗教の立場であり、棚瀬氏はキリスト教神学をこの立場にすえている。ここでの「隠された實在」とは他ならぬ神である。

さてこの隠された實在論の立場から、生命は如何なるものとなるのだろうか。

キリストの「我は生命なり、我を信ずる者は死すとも生きる」とか「我は世俗に死し、キリストに生きる」という言葉における「生命」はいかなる意味であろうか。この生命の意味を理解するためには、「神の生命」が前提となっている⁽¹²⁾。

基礎神学の立場からは、「存在」については「神がまず存在し、そしてその存在の分子として、人間およびあらゆる被造物の存在がある。神の存在は完全で、被造物の存在には限りがある。同様に、生命に関しても、神は完全であり、人間及び被造物は有限である。

宗教的な意味での生命と生物学的な生命の大きな相違は、前者が「生物学的な死によって終るものではない」という点にある⁽¹³⁾。

宗教的な意味での生命は生物学的にいう、時間空間に限定され、また物質化されたものではなく、人間が「心」をもった存在として、それ故に生物学的な死を超えて行くという側面をもっているのである。

また宗教的な意味での生命に関連して次の如く示している。

生命という概念が、生物学的生命という時間空間の中での限られた現象としてではなく、また物質としての生物系の生物学的な現象だけでなく、「心」と呼ばれるものをもった存在、心をもつゆえに、生物学的な死を超えてその生命が持続されるものとして捉えられている⁽¹⁴⁾。

生命という概念は、生物学的な有限なる現象により適用されるのではなく、人間が心をもつことによって、その肉体的な死によって生物学的生命が終ったとしても、そのことによって生命のすべてが失われたのではないというのである。ここで「心」というのは、靈魂の如きものを示唆しており、肉体が死すとも靈魂は不滅であるという考えが披瀝されている。しかし、このことがなければ、先の「我は生命なり、我を信ずる者は死すとも生きる」という言葉も、その真意を把握することが困難であろう。ここで、氏の見解をまとめると、次の如くいえよう。

1. 三つの實在論を設定して、第三の隠された實在論を最も根本的な基礎的實在論とし、そこに神をすえた。

2. 人間の生命を身体と心に分け、身体的生命は生物学的死と共に消滅するが、心の生命は不滅である。これは神の生命に通ずる。

手を加え、自分のため利用することによって、より良く生きようとする⁽⁵⁾。ここでの生き方は「価値」とかわる。ここに人間特有の生がある。行為としての生命は①が自然の生命であるのに対して、人間が人間として生涯生きる生命である。

③実在として生(命)

第一の生命が「経験される生命」第二の生命が「体験される生命」であるのに対して、第三の生命は、「信仰される生命」である⁽⁶⁾。これは人間のもつ表象作用によって経験・体験を超え、より根源的な生命を明らかにするものである。これは時間を超えた永遠不滅なものであると同時に、「万有を基礎づける普遍的実在」としての生命である⁽⁷⁾。あるいはまた、これは「価値」の究極的根拠であり、自然的生命に最終的に意味を与えるものでもある。

次に棚瀬睦男氏は次の三つをあげられる。

①素朴実在論(経験的認識?)

これは「日常生活を営み、また各個別的な学問を進め、その学問の立場から議論を闘わせる場合にとる立場」⁽⁸⁾で、哲学的反省を伴わないものである。これは科学的生命観においてみられるものである。この観点からの生命観の特徴は、①生物系と非生物系は根本的に異なる。②基本的に解放系である。③物理法則に従いながらも一般の解放系にはみられないような特異な現象(エントロピーを下げる現象)⁽⁹⁾がある。④非可逆的である⁽⁹⁾。

また科学的生命観の問題点ともいべきものについて、氏は次の如く示している。①この生命観はあくまで現象論的な段階の生命観であり、その根拠を説明する道具を、科学はもっていない。②現在、生物系と非生物系を基本的に区別する諸現象は何に由来するかという点に関して、十分な答えを持つことはできない。③各種の生物の目的性については、科学の立場からは説明できない。④進化に関する現象論的説明はまだ不十分であり、またこれによって生命の本質を探ろうとすることも困難である。

②批判的実在論(理性的認識?)

これは「学問の方法論ないし学問の真理性、妥当性について議論する立場」である。メタ・サイエンスの立場といえよう。これはまた哲学の立場でもある。哲学は「古来より、観念論、実在論、近代における現象論、実在主義、実証主義」など、それぞれの体系に従って理論が組織化されているが、棚瀬氏はとくに批判的実在論の立場をとる。批判的というのは、素朴実在論の立場に対して、それぞれに反省を加え、吟味をして「その論理的妥当性、真理性を考えて行こうとする立場である」⁽¹⁰⁾。

③隠された実在論(直感的認識?)

これは第二の哲学的立場のさらに基礎となる実在論で哲学的諸説を外からもう一度考究する。その意味でメタ哲学の実在論である。哲学的反省には諸種の立場によるそれぞれの異なった思想体系が組

1. 二種類説

生化学者、水原舜爾氏は生命について二種類をあげる。一つは生化学及び生化学でいわれる生命である。これは、生命現象―蛋白質―アミノ酸―RNA―DNAとして図式化されるような、今日解明されている科学的生命観である。

もう一つは宗教的生命観ともいべきものである。氏によれば、生命について考える場合には生化学等というものだけではなく、もっと根源的なものに注目すべきであるという。生物だけでなく無生物をも含めた生命を考え、「万物は一つの生命のあらわれである」といわれる⁽¹⁾。

このような生命観は、ノーベル物理学賞を受賞したマックス・プランク（一八五八―一九四七）や禅宗の内山老師の考えの中に見られる。プランクはいう。このような生命とは、「人間から独立した、大宇宙を支配する最高の力」であると。また内山老師は「すべての個物は万物とぶつ続きのたった一つの生命を生きている」という。現実社会に展開されている諸々の現象は、この大きな生命が、それぞれ具体的な姿をして現れているものにすぎない。

「我々人類をも含めて天地万物は、プランクのいう『力』、すなわち『たった一つの生命』の化身⁽²⁾」である。物理的には「物質はエネルギーの化身」ともいえるが、このような個々の現象は大生命の現れということができる。

生命をわれわれ一人一人の生命に限定することなく、より根源的な生命にまで注目することは極めて重要である。これこそ、まさしく、仏教でいう無量寿、無量光の大生命を示唆するものである。

2. 三種類説

ここでは、中埜肇、棚瀬睦男両氏の見解をみてみよう。

まず、中埜氏は次の三種類をあげられる。

①現象としての生(命)

科学が取り扱う、知覚しうる生命の組織・機能・行動に関わる生命、「有機物質（とくに蛋白質と核酸）からなる細胞編成体のなかに生起し、①刺激に対する反応 ②環境への調節と適応 ③物質代謝による成長と自己同一性の維持 ④生殖と遺伝（遺伝子による情報伝達と自己再生産）⑤変異や淘汰による退化を特徴的な内容とする過程」と定義される生命⁽³⁾、すなわち、生物学で取り扱われる生命である。この種の生命は人間が他の生物と共有するものでもある。しかしこれは生命そのものではない⁽⁴⁾。

②行為としての生(命)

「普通の生物は自然の秩序に従って自動的に生き自動的に死ぬ」。しかし、人間は自分の意志によって目的を設定し、その実現に努力する。人間は自然条件をありのままに受け入れるのではなく、それに

生 命 観

——その多様性について——

服 部 正 穩

序

生命とは何か。『広辞苑』には「①生物が生物として存在し得るゆえんの本源的属性として、感覚・運動・生長・増殖のような生活現象から抽象される一般概念。いのち。②物事の存立にかかわるような大切な点」と示されている。いまここで問題とされている「生命」は①に関連するものである。しかし、生命そのものについて再度考究してみると、それは決して一義的に理解されるものではないようである。

一般に生命は具体的な生命現象や生命活動を通して理解される。そして人間の生命についていえば、身体的レベルの生命が唯一のものだとされやすい。しかし、生命は身体的なものに限定されるだろうか。例えば、医師が患者を治療する場合、医師が患者の身体的レベルの生命のみを念頭に置くだけで充分であろうか。身体的レベ

ルの病は治ったとしても、その患者が全快しないようなことがある。身体的には何ら異常がないように見えても、当人はなお病のなかにいるのである。それは生命の完全な回復がなされていない状態である。生命の完全な回復のためには、そこに、身体的なレベルのもの以外の、例えば心理的・精神的レベルのものが考慮されなければならない。かくして、生命を考える場合には、「生命と言えば身体的なものに限るという考え方」を超えなければならない。

さらに、生命は人間のみに限ったものではない。かくして、生命について考える場合には、より幅広い視点からこれを考察する必要がある。観点の相違によって、そこに「生命」の多様性或いは多様なレベルが浮彫にされてくる。以下、先学諸師の研究の後を辿りながら、そのことを明らかにしたい。